慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アリストォテレース経済学の疑点 福田徳三博士の「アリストォテレースの『流通の正義』：マルクスの其解釈に関する疑」中に現れたる拙稿「アリストテレース経済学」の批評に就いて
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.1 (1928. 1) ,p.1- 22
JaLC DOI	10.14991/001.19280101-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學

第六卷 第四號

口繪、莊内藩黌、大寶寺時代）舊致道館見取圖

□支那の史料に現はれたる我が上代（續）　橋本　增吉

□莊内藩主酒井忠德の施政資料　國分　剛二

□伊豫大三島の唱呼に就て　菅　菊太郎

□書評○南朝の研究○東洋史說苑○牟婁口碑集○老媼夜譚○淡路と西宮に於ける人形操の調査○山形縣史蹟名勝天然紀念物調査報告○石川縣天然紀念物調査報告○習俗雜記○飛驒史料○東京近郊史蹟案内

會費年四圓也　壹冊定價壹圓也　郵稅四錢也

昭和二年十二月發行

三田史學會

メガネの御用は正確にして廉價な

慶應義塾大學病院指定

紫鳳堂眼鏡店

麻布材木町電停際

電話青山七四七〇番

三田學會雜誌　第二十二卷　第一號

アリストォテレース經濟學の疑點

福田德三博士の「アリストォテレースの『流通の正義』――マルクスの其解釋に關する疑」中に現れたる拙稿「アリストテレース經濟學」の批評に就いて

高橋誠一郎

一

余は昭和二年三月日本評論社の再三の懇望、もだし難く、同社發行の「經濟往來」の爲めに、古來の經濟學說と其の言說者の個人的境遇の關係の一斑を述ぶるに當り、我が經濟學界の耆宿商科大學敎授福田德三博士が曾つてサー・ダッドリー・ノース

の Discourses upon Trade, 1691. に關し、一千九百十一年版、コンヲァドの「國家學辭典」中に於けるノースに關する一項の所說に誤られて(博士は此の項目の筆者 Meitzel 氏に負ふ所を明記せらるゝ所なきも)、極めて大膽なる解釋を下されたるを遺憾とし、ダブルユー・ジエ・アッシリー敎授が初め一千八百九十七年を以て Quarterly Journal of Economics. の七月號に揭げ、後、其の Surveys Historic and Economic. に收められたる貴重なる論文 The Tory origin of free trade policy. 中に於いて考證せられたる所に基き、Meitz 1 及び福田博士の誤謬と思惟する所を指摘せり。吾人が此點に氣付きたるは此の時に始まれるに非ずして、曩きに「經濟論叢」第一卷第一號より第三卷第五號に亙りて連載せられたる博士の論攻「英國の學問としての經濟學、殊に商國主義の始終」なる長論文を謹讀せる時に在り。吾人は大正七年、「三田學會雜誌」第十二卷第七號に於いて、第十七世紀に於ける英國の利子論爭を述ぶるに當り、アッシリー敎授の所言を援用して、密かに博士の注意を待てり。然るに其の後、大正十年版大鐙閣出版「改版經濟學考證」に收められたる同論攻(增補せられたるもの)に於いても吾人の豫期に反し、此の點に關して何等の訂正あるを見ず。大正十四年十月發行の「經濟學全集」第三集「經濟史經濟學史研究」中に現れたるものも亦た同樣何等の修正を見ず。假りに博士が Ashley 敎授の意見を採用することなく、Meitzel なる人が辭典の一項目として執筆せる獨斷不詮索の安價なる記述を秘かに金科玉條として依然之れを祖述せらるゝとするも、之れとは別個の見解に立てる經濟學界最高權威の一たるアッシリー敎授の所言に對し、苟も之れを知る以上、必ず一言ある可きものと信じたるに、其の豫期は無殘に裏切られたり。是に於いて乎、余は博士より寄贈を給ひたる「經濟學全集」に於いて再度之れを精讀して、前揭「經濟往來」本年四月號に於いて、初めて博士の名を擧げて其の誤解と思惟する所を略說せり。而も吾人は茲に至るも尙ほ之れに關する博士の意見を聽くことを得ず、(余の知る限りに於いては)。余は余の如き學界の末流に立てる者の言動が博士の如き先輩大家の一瞥をすら受くること能はざるを思ひて、深き鬱憂を感せざるを得ざりき。

然るに余は昨夜「改造」第十卷第一號(昭和三年一月號)の頁を繰るに當り、慮らずも、博士が「社會科學研究」第一卷第三號所載の拙稿にして八十二頁に亙れる「讀む者をして頭痛岑々たらしむる」「アリストォテレース經濟學」を閱讀せられ、其の「アリスト

テレースの『流通の正義』――マルクスの其解釋に關する疑(其二)中に於いて數頁に亙りて之れを批評せられつゝあるを發見せり。吾人は曩きには博士の一言を期待して、遂に之れを得ず。今は全然別個の問題に就きて何等の期待なくして、博士の攻擊的批評を受く。聊か意外の感なきに非ず。今、右記博士の論文中、余に關する部分を再讀し、其の攻擊の不當なるを痛感して、心中頗る平かならざるものあると同時に、曾ては僅々數頁の小言すら遂に博士の一讀を受くること能はざりしやを想ひて多大なる遺憾を忍びたる余は、今、此の學界の長老が八十餘頁に及べる拙稿を閲讀せられ、其の批評の爲めに貴重なる頁を割かれたることを深く光榮とせざるを得ず。余は本「三田學會雜誌」昭和三年一月號に執筆の約ありし堀江歸一博士が突然の逝去に因りて、空白と爲れる頁を補充するの必要に迫られ、他の計畫に基きて聊か攻究を進めつゝありしが、今、博士の攻擊を受けて、沈默を守ること能はず、暫く先きの計畫を中止して、直ちに博士の批難に答へ、謹んで應酬の禮を盡さんとす。

二

博士は先づ、凡そ經濟學史に關する著書は多少なりとも、アリストテレースの經濟說に就いて必ず言及する所あるも、而も多くは極めて簡單なる紹介に止まり、特に研究の跡を示さざる旨を述べ、特に希臘の經濟學說若しくは經濟思想を取扱へる若干の著書中に於いても、唯だアリストテレースを稱揚するものあるのみにして、何故に彼れの經濟學說が重要視せらる可きものなりやを適確に示したるものは甚だ少しと說き、其の反對に、今日の經濟學に對するアリストテレース經濟學說の貢獻を一掃的に否認する者ありと做し、而して其の甚しきものとして佛國學者 A. Souchon 氏の Les Théories économiques dans la Grèce antique, 1898. 中の所言、並びに余が「社會科學研究」に載せたる前掲論文の結句を引用せられたり。

スーション氏の所說に就いては姑く言はず。博士によりて引用せらるゝの光榮を有したる吾人の所言は下の如し。「然るに其の合理的要素を古代哲學に求めたるスコラ哲學の拘束より解放せられんとする近世哲學の努力は徐々に實現せられたり。倫理的及び政治的科學の研究者は彼れ等の問題の解決を思想界の暴君たるアリストォテレスの權威に求めずして、人間性の直接研究に依賴せり。而

して傲岸なる新興ブルジュワジーは又た、輕侮の眼を以て、商工業を觀たる古代哲學に學ぶ所なくして、只管自己の力によりて自己の問題を解決せんとせるなり。國民經濟學は『萬學の父』アリストオテレスに發せずして、却つてアリストオテレス及びスコラ哲學に對する反抗の時代に萠芽を發したるものなり」(八一—八二頁)。

博士は如何にして以上の所言を以て、今日の經濟學に對するアリストテレース經濟學說の貢獻を一掃的に否認するものと稱せらるゝや。余は單に以上の所言によりて、近世の經濟學が其の起源をルネサンスの時代に有することを述べんとしたるに過ぎず。是れまで堅く閉じられつゝありし「自然」の書典は近世の初期に於いて吾人の眼前に開かれたり。ルネサンス以後に於ける驚嘆す可き自然科學の發達は歐洲思想家の上に永く而して大なる影響を及ぼせり。フランシス・ベーコンはスコラ哲學を葬るが爲めに現れて、科學の王國の到來を豫言せり。スコラ哲學者はアリストオテレース哲學を敎會の信條と一致せしむるの可能なるを信じ、其の神學的要素を諸敎父より得ると同時に、其の合理的要素を主として此の偉大なる希臘哲學者より受けたり。而してアリストオテレースは中世の哲學者を通じて、恰も「暴君」の如く、當時の思想界に君臨せり。福澤先生其の「西洋事情」中に曰く、「世人皆古聖アリストートルの學派に心醉し、附會奇異の神說を唱へて有用の實學に志すもの」なかりきと。吾人が前揭の論文中に於いて、斯くの如き意味を以つて「思想界の暴君たるアリストオテレース」云々と稱したればとて、福田博士の如く、特に(!?)の符號を附して之れを引用し、甚しく驚き且つ訝かるの要あらざる可し。而して近世の初期を通じて這個スコラ哲學の束縛より解放せられんとする近世哲學の努力が徐々に實現せられたることも亦、疑問の餘地なき所なる可し。

自然科學は一切の科學を養育す可き偉大なる母と認められたり。トーマス・ホッブズは倫理科學が感覺及び想像に其の動機を有する心意の運動を取扱ふが故に、自然科學に從つて考察せらる可きことを主張せり。(Elements of Philosophy, pt. I. ch. 6.)。デヴィッド・ヒュームは、一切の人智の基礎が經驗的方法に據る人間性の研究に由つて發見せらる可きものなりと做せり。(A Treatise of Human Nature, bk. I. pt. iv. sect. 7.)。而して是れ等の大哲學者が初め個人的意識の作用に於いて發見せる自然科學上の原理は漸次社會的界域に移されたり。フランスワ・ケネーは恰も血液

が人體内に流るゝが如くに、富の循環する態樣を描寫せり。彼れは固と英國の經驗主義者が個々の人間性に於いて發見せんとせるものを國家に適用せんとせるなり。而もフィジオクラアトに在りては、尙ほ人間的組織の肉體的方面が强調せられつゝありしも、アダム・スミス以後の著者は次第に心理的方面に注意を拂ふに至れり。スミス及び功利主義者が經濟現象を解釋せるは先づ心理學に據れるものなり。(O. Fred. Boucke, The Development of Economics, 1750-1900, 1921, p. 319 f.)。スミスは其のグラスゴォ大學に於ける倫理哲學の講義に於いては略々アリストオテレースより傳承せるスコラ哲學の傳統を遵奉して變らざりき。而もスミスは特に一の點に於いてアリストオテレースと相違せり。即ちアリストオテレースが「經濟學」によりて家事經營の實際的知識若しくは技術を意味したるに對し、アダム・スミスは經濟學に定義して「人民及び主權者の兩者を富裕ならしめんことを提唱する」ものと做せることと是れなり。(Wealth of Nations, bk. iv. Introduction.)。換言すれば前者が主として家計の見地より經濟を論じたるに反し、後者は主として國民的意義に於いて之れを取扱へるの相違あるなり。而してスミスに在つては經濟學は尙ほ未だ基督教的獨斷說の影響より完全に脫却することを得ざりしと雖も、彼れの後を承けたる功利主義的經濟學は非倫理的不可識論的、概念に指導せらるゝものなりき。感覺主義は正さに總べてのものなりき。第十九世紀後半の經濟思想が事實上ソクラテス學派の影響を受くること極めて尠少なりと觀るは恐らく異論なき所なる可し。

而して又た近世經濟思想の黎明期たるマーカンチリズムの時代に於いて、國家的經濟問題を論じたる新興動產階級の鬪士が多くアリストオテレースの權威に依賴する所なかりしも亦た事實なり。英吉利、佛蘭西、ネザーランド及び伊太利亞に於いては第三階級として次第に其の地步を固めたる市民階級は遂に封建的國家を覆せり。彼れ等は其の權利と自由とが舊特權階級によりて奪ひ去られたるものと認めたり。彼れ等は人爲の法制に對して自然法を對立せしめたり。ジョン・ロックは「人は本來自由にして又た平等なるものなり」と主張し、アレグザンダー・ポープは「自然の狀態は神の御代なりき」と歌へり。聖トマッソ・ダキノの學徒に取りては自然法は當に人法の理想なりき。然るにジャン・ジャック・ルッソーの流を

汲める者に取りては自然法は全然人法を排除するによりて到達せらる可き理想と爲れり。這般の對立は特にフイジオクラアト學派の著作中に在りて顯著なるものあるを見る。斯くの如き時代に於いて甦れる古代哲學は又た個人的自主的傾向の發生に由る政治的社會的頽廢に反抗して、團體的生活の理想を合理的基礎の上に建設せんことを努めたるアリストオテレースの哲學よりも、寧ろ國家的拘束を脱却して個人的生活の完成に向へるストア哲學なりき。而して中世末の經濟的大變動の時期に於いて貨幣及び貿易の問題が發生し來れる時に於いて行はれたるよりも、更らに一層の熱心を以つて第十九世紀初期の政治家及び商人は再び同一の問題に其の力を注げり。而も彼れ等は亦た古代哲學に學ぶこと極めて尠少なりしものなり。

然れどもソクラテス學派の經濟學說は古典的經濟學者によりて閑却せらるゝこと大なりしだけ其れだけ一部の反動的經濟思想家の上に深甚なる影響を及ぼせるの事實は吾人が近く雜誌「思想」の爲に執筆せる小論文中に之を述べたる所なり。此の小篇は初めよりして編輯者によりて四百字詰二十枚を限度として依賴せられたるものにして、頁數の制限は余をして充分に論述するの餘裕を有せしめざりしと雖も、而も其の中に於いて略々後世の經濟思想の上に及ぼせる希臘經濟學說の影響を論述せり。當時吾人は尙ほ「改造」新年號を接手せず。從つて同篇中に於いては福田博士に答ふること能はざりしなり。吾人は決してカール・マルクスと共に、アリストオテレースに對して「偉大なる研究者」「思想界の巨人」若しくは「古代の最大思想家」なる最上級の尊稱を獻ぐることを拒むものに非ず。吾人は決して福田博士が吾人に對して云はれたるが如く、アリストオテレースを克服し終り、葬り去るものに非ず。吾人は唯り彼れのみならず、ソクラテス學派の經濟學說が新たに現代に甦れるの事實を認め、又た新たなる意義に於いて彼れ等を甦らしむるの必要あるを感ずるなり。吾人は唯だ單に近世的經濟學がアリストオテレース及びスコラ哲學に對する反抗の時代に其の萠芽を發せるものと稱したるのみ。吾人はアリストオテレースを閑却し、滅却することなければこそ、自己の不敏を顧みずして彼れを研究するなり。若し尙ほ疑ひあらば「乞ふ、明窓淨几の下、心を靜かにして」吾人の文を再讀せられんことを望む。

三

福田博士は河上肇氏及び宮川實氏の譯文によりて長々とマルクス「資本論」の一部を引用し、更らに同書の同一部分を高畠素之氏譯より重ねて引用し、以て余が「後年カール・マルクスは、アリトオテレースの如き大思想家すら、交換せられたる物件が有するの觀ある通有的要素及び交易が一見、是れ等のものをして等一の價値たらしむるが如き事實に由りて迷はされたるの事實に注意を向けたり」云々と言へるを以て「決してマルクスを正しく傳へたものでないことは、私に於いて、今これを辯せずとも、右掲出の兩譯文を、少しく注意して一讀した人々の、直ちに氣付くところであらう」と述べられたり。余は博士の引用せられたる兩日本譯によりてマルクスの所說を再讀三讀するに及びて一層余がマルクスを誤讀せるものに非ざることを知れり。

アリストオテレースは貨幣が尺度と等しく諸貨物をして同一單位を以つて測定せられ得るものたらしむるによりて之れを等一化するものと觀たり。彼れ曰く「交換なくんば、商的結合は可能ならざる可く、等一化なくんば、交換は可能ならざる可く、而して同一單位を以つて測定せられ得るものたらしめらるゝの可能性なくんば、等一化は可能ならざる可し」と。而して彼れは、嚴密に言へば、著しく相違せる諸貨物をして比較測定し得るものたらしむるは不可能なりと雖も、實際的目的の爲めには略々之れを能くし得るものと思惟せり。是に於いて乎、或る一の標準は存在せざるを得ず。而して斯は因襲の結果として決定せられざるを得ず。アリストオテレースは、一切の生產物が測定せらる可き共通の標準を以つて「需要」なりと觀たり。而して彼れの所言に從へば、貨幣は因襲によりて設定せられたる需要の代理者の一種と見らる可きものなり。總べての物は貨幣によりて測定せらるゝが故に、斯はあらゆる物件をして比較測定し得可きものたらしむるなり。斯くて吾人が既に言へるが如く、アリストオテレースは一方に於いては貨幣價値の動搖する事實を認め、他方に於ては著しく相違せる諸貨物をして同一單位を以て測定せられ得るものたらしむるを不可能なりと認めながら、貨幣の價値を以つて他に比して著しく安定なるものと看做し、實際上必要なる限りに於いては貨幣が能く共通の尺度たることを承認せるなり。（「社會科學研究」第一卷第三號所載前掲

拙稿四一―四二頁）。

而もマルクスを以て觀れば、アリストオテレースは「交換は等一なくして存在しなくして存在し得るものに非ざる」をを指摘する點に其得るとなく、等一は通約性なくして存在し得るものに非ざる」をを指摘する點に其の歩を停めて、（高島氏譯「行き詰つてしまつて」價値形態のより、以上の分析を放棄せるものなり。彼れは斯くも多種多樣なる物が同一單位を以つて測定せられ得るの一事を以て實際上不可能なり。と觀じながら、需要の代理者たる貨幣に於て（實際的必要の應急手段）として共通の尺度を看出せるなり。アリストオテレースに從へば、需要は實に凡ゆる商取引を接合し、社會を結合する紐なり。而してマルクスを以て觀れば、彼れが此の需要の「實際的必要の應急手段」たる代理者を貨幣に求むるに止めて、商品價値の形態に於ては、一切の勞働が等一なる人間勞働として、即ち同じ値打のものとして、言ひ現さるゝといふ事實をば、價値形態それ自身の中から看取する」（高島氏譯）を得ざりし點に於いてアリストオテレースは頓挫せり。而して透徹、アリストオテレースの如き頭腦をして尙ほ迷はしめたる原因はマルクスに從へば、希臘の社會が奴隷勞働に立脚し、人類及び其の勞働力の不平等を其の自然的基礎とせるの事實なりしなり。前掲論文中に於ける吾人の所言が簡略なりしは、吾人が特にアリストオテレースとマルクスとの關係を述ぶるを以て主眼とせざりしが爲めなり。吾人は單にマルクスが、アリストオテレースは價値的概念缺如の爲めに其の分析に於いて頓挫を來せるの事實を注意せることを擧示せるに止まる。吾人の態度には毫も博士の言ふが如く「彌次馬的」なる所なし。吾人はマルクスを「ひいき」したることなし。從つて又た彼れを「引倒し」たることなし。地下のマルクスは前掲の小論文によりて恐らく何等の迷惑をも感ずることなかるべし。而も吾人は此の點に於いて必ずしもマルクスを肯定するものに非ず。吾人にして若し此の點に於いてマルクスを論ずるとせば、果して家屋が寢床及び家屋の兩者に於いて事實等一なるものを代表する限りに於いて、寢床と對比して、开は等一なる或る物即ち人間の勞働を代表するものなりや否や、又たアリストオテレースの觀たる希臘の社會が果して事實奴隷勞働に基礎を有したるや否やを檢討せざるを得ざるなり。

四

福田德三博士は余の前掲小研究を貶せらるゝと共に、「今、露國經濟學界に於いて、ニコライオン氏以後の第一人者と認められてゐるゲレスノフ氏」の論文を稱揚し、併せて余が片言隻語も之れに言及せざりしことを怪かられたり。余は固より自ら、他人の作品に對して自己の作品の價値を主張し得るまでに厚顏なるものに非ず。ゲレスノフ氏の論文は恐らく其の學問的價値に於いて余の其れに比し十倍以上に大なるものあらん。然れども同氏の論文が、苟もアリストオテレースの經濟學說を論ずる者が必ず引用し言及せざるを得ざるまでに偉大なる價値あるものなりや。吾人は公平なる學者の後日の判斷を待たんとす。

博士は又た、吾人が「ヘネーやトリーヴアー輩の雜書までも、無數縱橫に列記」せることに對して非難的口氣を漏されたり。余はヘネー、トリーヴアーの兩氏が不幸にして余によりて引用せられ批評せられたるが爲めに、博士によりて、輕輩視せられ、其の著作を以つて「雜書」と嘲けらるゝに至りたるの不運に同情せざるを得ず。ヘネー氏の「經濟思想史」の眞價に就いては自から論あらん。然も同書は寥々たる英文經濟學史若しくは經濟思想史上の著書中に於いて最も纒れるものとして我

が國に於いても、其の讀者少なからず。我が慶應義塾に於いても曾つて小泉信三教授によりて經濟學史の教科書として使用せられたり。從つて其の所說に養はれたる人も多からんを思ひて、同氏の論述中、吾人の贊同し難き點を擧示せるに於いて、何の不當が之れ有らん。若し夫れトリーヴアー氏の著書に至りては、類書最も少なきものゝ一にして、吾人は幾多の點に於いて同氏の所論に不滿を感じながら、同氏の研究に導かれて多大なる便宜を得たり。此の書は既に谷口彌五郎氏の「希臘經濟思想概論」によりて明快なる紹介を試みられたるのみならず、福田博士其の人の校閲を經て、「商學研究」第二卷第一號に掲げられたる梅北末初氏の研究論文「希臘經濟思想概觀」によりて依據せられたり。梅北氏は其の論文に附記し、「本稿を草するに當つて、論述の方法は主としてA. A. Trever氏に據り、又高橋教授の論文を參考した所が多い」と言明せられたり。博士は啻だに自己の指導の下に在りし梅北氏が主として「トリーヴア輩の雜書」の論述方法に據りて、其の論文を草せらるゝを默許せらるゝのみならず、之れに自ら校閲を施し、其の責の一半を分つて、我が最高學府の一たる東京商科大學の機關誌上に之れを掲載せしめながら、同じき人

の同じき著書が偶々余によりて引用せられ、批評せられたりとて、之れを顧みるに値せざる輕輩の雜文視せらるゝ所以如何。願はくば與り聞かん。

五

博士は又た、余が「アリストオテレースは周到の注意を以て、正義を區別して分配的の共れと補正的の共れと做せり」と斷言しながら、數頁の後に至り（三七頁）、突如として「既述の如く、分配的正義は（中略）然るに、交換的正義は兩者より生ずるものなり」と云へりと稱して、激しく余を非難せられたり。余は博士によりて引用せられたる余自身の文章を讀みて、背汗三斗の思をなせり。蓋し余が如何に惡文家なりとするも、「分配的正義は、然るに、交換的正義は」云々と言ふが如き不思議なる文章を草したる覺え毫もなきが故に、雜誌掲載の分には恐る可き誤植の存したるものと想像せるが故なり。然れども余は「社會科學研究」第一卷第三號を取りて、博士の擧示せられたる頁を開くに至りて安心せり。同頁には明かに「既述の如く、分配的正義は幾何學的比例の原則より出で、補正的正義は算術的比例の共れより發す。然るに交換的正義は兩者より生ずるものなり」と誌されつゝあるなり。然らば余は博士の言はるゝが如く、突如として何等前後の關係なく、茲に「交換的正義」なるものを掲げたるや。

博士は余を難じて曰く、「然らば、氏は『流通の正義』又た『交換的正義』の別について、何故初めに斷り置かざりしや。議論の央に前後何の關聯もなく、俄か第三に、正義たる『交換的正義は兩者より生ず』と放言し、而して、毫も其の跡始末を付け居らず」と。（此の文にこそ誤記若しくは誤植あるが如し）。博士よ、願くは、遡りて僅かに一葉を繰るの勞を惜まるゝ勿れ。其處にはアリストオテーレスは「正義は報復なり」と做すの定義の不適當なる所以を闡明せりと雖も、而も交易的結合に在りて、此の種の正義、即ち平等に基くことなく、比例の原理に從へる報復が結合の紐として作用する所以を論述せる旨を記せり。（三五頁）。而して三十七頁に至り、此の「報復若しくは報償の法則、換言すれば、交換的正義」が分配的正義及び補正的正義と異なる點を擧げたるなり。何の突如かあらん。何の卒爾かあらん。「突如」は唯り、漫然頁を繰りて、徒らに寓目の點を指摘するの人にのみ感せらるゝ所のものなり。吾人が爰に對角線圖を掲げたるが如きは、決して博學を衒ふが爲めに非ずして、之れを用ふ

るに非ざらば說明の頗る困難なるを覺えたるが爲めなり。余がサー・アレグザンダー・グラントを引用せるが如きも、アリストオテレースの難解なる章句に對する一アリストオテレース學者の解釋を揭げて讀者の參考に供したるに過ぎず。

六

事の序に一言す可し。久しき以前に於いて福田博士は其の「トマス・ダキノの經濟學說」中に於いてアリストオテレースの經濟行爲の分類を揭げられたり。今、吾人が再び之れを參讀するに當りて聊か了解に苦むは、博士が同論文中に揭げられたる分類表は B. Jowett の The Politics of Aristotle. 一千八百八十五年版第二卷四十五頁の Synopsis of the various divisions of κτητική と題するものに據られたるものなるが、不自然的即ち狹義のクレマチスチツケの第一たる商業（メタブレチツケ）を二つに分ち、一をエムポリア、問屋業、二をカピリツケ即ち海漕、陸運、店賣業を含むものと錄されたることなり。メタブレチツケ（μεταβλητική）は、アリストオテレースの用法に從へば「不自然、即ち狹義のクレマチスチツケ」と同義にして、其の第一に揭げられたる「商業」はエムポリア（ἐμπορία）或ひはカピリツケ（καπηλική）にして、其の中に「海漕、陸運、店賣業」の三者を含むものには非ざるか。尙ほ博士がクレマチスチツケの第二として中間的取財形態を揭げ、之れを「伐木業、鑛山業」とせられたるは余が前揭小論文中に引用せる D. G. Ritchie 等の人々と等しく、矢張り Jowett に依れたるものなる可きも、余が同文中に縷說せるが如く、伐木、採鑛の兩者は唯だ此の中間取財形態の一部を例示せるに過ぎずして、決して其の全部を代表せるものに非ず。（福田博士著明治四十年版「經濟學研究」一〇一頁、大正十四年版「經濟學全集第三集八九四頁參照）。余の如きも曩きには先輩の解釋に從ひて、爾く思惟したるも、τρίτον δὲ εἶδος χρηματιστικῆς, ὅσα ἀπὸ μεταβολῆς καὶ τῆς πορίσεως (ἔχει γὰρ καὶ τῆς κατὰ φύσιν τι μέρος καὶ τῆς μεταβλητικῆς), ὅσα ἀπὸ τῆς καὶ τῶν ἀπὸ τῆς γινομένων ἀκάρπων μέν, χρηστίμων δέ, οἷον βλοτομία τε καὶ πᾶσα μεταλλευτική. αὕτη δὲ πολλὰ ἤδη περείληφε γένη πολλὰ γὰρ εἴδη τῶν ἐκ γῆς μεταλλευομένων ἐστίν. なる章句は斯くの如き解釋を許さゞるが如し。此の點に就きてはアッシリー教授の解釋なきに非ざるも、余は之れにも贊すること能はずして、前揭論文中に於いて自己の所信を述べ置けり。（七〇頁參照）。

吾人は常に自己の研究の不完全を愧ぢ、更らに廣く讀み、深く考へざる可らざることを痛感するも、而も、這回福田博士によりて發せられたる批難に對しては不幸にして一も承服すること能はず。其の主要なる非難は博士の卒讀に基きて漫然發せられたる攻擊に過ぎざるを感せざるを得ず。而も斯くの如き不深切なる批評が、二十年の以前、余が親しく其の講莚に列し、深大なる尊敬を以て其の講義を傾聽せる舊師の筆より出でたるに於いては吾人は唯だ筆を擱いて茫然たるの外なきなり。

（昭和二年十二月二十二日起稿）

經濟史研究序論

（歴史哲學の一考察）

野村兼太郎

一

社會現象を對象とするすべての學問がその對象の複雜なるために、極めて不確實なる立場にあることは拒み得ない事實である。リッケルトのやうに方法論的構成を以つて科學の種類を區別することは、論理的峻嚴を有してゐるかも知れないが、事實の眞相を遠ざかつてゐるやうに思はれてならない。歴史の對象がその複雜多樣なる社會現象であり、過去に於ける個別的現象――換言すれば時間と空間との範疇に支配さるゝ現象の確實なる把握を歴史は必要とするものであることは、歴史を如何なる言葉を以つて定義する者も大體に於いて承認し得るところであらう。（Theodor Lindner, Geschichtsphilosophie, S. 1.; Ernst Bernheim, Lehrbuch der histori-